

与那国の織物概観

與那嶺 一子

(沖縄県立博物館)

Notes on the Weaving of Yonaguni

Ichiko YONAMINE

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

与那国島には技法の異なる織物がいくつもあり、それらは数ある沖縄の織物の中でもさらに「与那国の織物」として位置づけられている。昭和62年、伝統的工芸品として通産大臣の指定を受けた「与那国の織物」の品目を見てみると、与那国ドゥタティ、与那国花織、与那国シダディ、カガヌブーなどがあり、この小さな島にこれだけの織物技術が現在も伝承されていることは、ひとつの驚きでもある。

『李朝実録』に見る与那国の織物

与那国島に見られる織物技術がどのようにして伝わり、どういう過程を経て現在の姿に発展してきたかは明らかではないが、最も古い記録は『李朝実録』の『成宗康靖大王実録』にあり、1477年、三人の朝鮮漂流民が与那国の織物事情を次のように報

告している。

一、無麻木綿、亦不養蠶、唯織苧為布、作衣如直領、而無領及襞積、袖短而闊、染用青藍、中裙用白布三幅、續繁於臀、婦人之服亦同、但内着裳而無中裙、裳亦染青
====略====

一、織布用簇杼、模様與我國同、其他機械不同

この報告から、次のことが考察できる。

1. 繊維として木綿も絹も使われておらず、「苧」で布を織っていた。
2. 染料として藍が使われていた。
3. 織機には簇と杼があるが、その他の機械は朝鮮のものとは異なっている。

ここで織りに使われた「苧」とは苧麻だということが現在は定説となっており、当時すでに、苧麻から糸を取り布を織る技術があったことが分かる。

次に青藍を染に用いたとあるが、この藍がどういう種類のものであるかは不明であ

る。昭和13年に沖縄を調査した田中俊雄氏は著書『沖縄織物の研究』で「琉球藍であろう」と述べているが、現在、与那国島では琉球藍の栽培と染色の技術は跡絶えており、最近まで、伊豆味から琉球藍を買って染めていたようである。蔵元ナスマ氏はかつて「藍を植えて染めていた」と語っており、また与那国町伝統織物事業共同組合の徳吉マサ氏も先輩方から藍を植えて染めた話を聞いているところをみると、藍は確かに染料として栽培されていたはずである。同島で与那国の織物を研究している与那霸直子氏によると、インド藍、蓼藍、琉球藍をそれぞれ植えつけてみたが、インド藍、蓼藍は繁殖するが、琉球藍の場合は育ちにくく、土地改良関係者から、こここの土壤では琉球藍は育たないとの返答を得ていることが確認された。朝鮮漂流民が見た藍や島の古老が使っていた藍は、琉球藍ではなく、インド藍か蓼藍だった可能性が大きい。

三番目の織機についての報告であるが、簇と杼が使われ、その他は朝鮮のものとは違う織機ということで、『沖縄織物の研究』には15世紀当時の織機について、戦前まで見られたいざり機ではなく、台湾のアミ族やタイヤル族が使っていたような機台のないものだったのではないかと述べられている。岡村吉右衛門氏が編集した『台湾の蕃布』によると、台湾の機は基本的に機台がないが、また簇も見られないもあり、朝鮮人達の見た織機は、台湾のものとも違う構造であったことが分かる。

経縞と碁盤縞

与那国の織物のうち、経縞と碁盤縞は、沖縄の他の島々には見られない特異な展開を示している。碁盤（グバン）とは、同島では格子縞を言い、それでドゥタティと言う労働着を仕立てた。

『沖縄織物の研究』や『絣をたずねて』で田中俊雄氏は、与那国の縞柄と碁盤柄についてかなり触れている。今回の調査では、伝統的な柄として織られているものには、田中氏が調査した頃にはなかった「カタンカアヤ」「七五三」「ダマトグバン」といった新しい名称があり、また氏の著書で報告されたもので今は織られず確認できないものもあった。

田中氏は「ムルアヤ（諸綾・総綾）」について「シンメトリックに反復する縞」と、また「カタアヤ（片綾）」は「横流れになって反復しない柄」と解釈しているが、現在、地元では「ムルアヤ」は諸羽の綾で同間隔で続く縞、また「カタアヤ」は片羽の綾だと考えられている。諸羽とは簇の一羽に二本同色の糸を入れることで、片羽は異色の糸を入れることである。片羽の綾は「ムンチアヤ」とも呼ばれ、最近は「シラミチ（ヤシラミの意味）」とも言われることもある。少し変わった縞として田中氏が紹介した「ミンダッターミ」は現在でも男性の夏着として需要があるが、「パダガヤ」「ミンカタアヤ」「ミンナヌグバン」「テュッテナヌグバン」といった文様については確認できなかった。

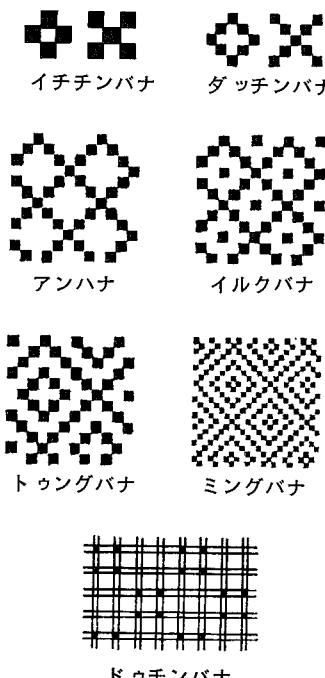
花 織

与那国の花織には、平織組織を変化させたものと、平織組織に紋織組織を加えたいわゆる真田織と呼ばれる浮織とがある。浮織は板花織と呼ばれている。

平織組織からの花織は、首里花織の名で知られているものと同技法であり、この技法は沖縄全域に渡っていたことが分かっている。文様の面では、はるかに首里花織の方が色数も多く華やかでパターンも多い。与那国花織のパターンは数は少ないが、菱柄（アンハナ）、中に点の菱柄（イルクバナ）、二重の菱柄（トゥングバナ）、三重の菱柄（ミングバナ）と紋織物そのものの基本的パターンであるといえる。

1848年に発令された『衣服定』によると、

花織のパターン



庶民には花織の着用が禁じられており、一般の着物として織られるようになるのは明治以降で、与那国花織もそれ以後に技術が伝わったのではないか。また、王府時代に八重山地方で貢納布として花織が織られたという記録はなく、技術が伝承されていた可能性は少ない。首里の工芸学校出身の糸数某が与那国で花織の技術指導をしたとの話もあるが、その点は確認できなかった。

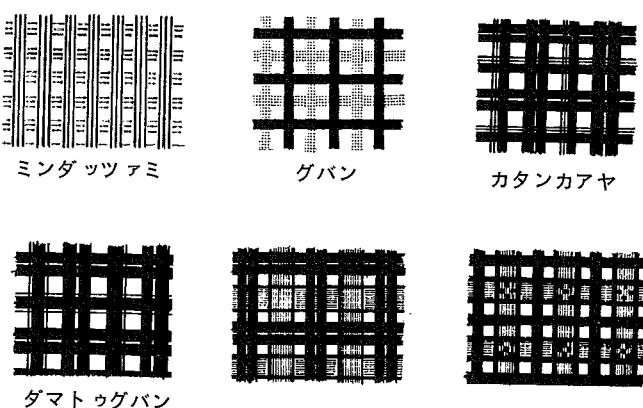
板花織によるティサージは同島ではシダディの名があり、神事につながる宗教的意味の深いものとして、または女性から男性へと贈られウミイのティサージとして知られている。詳しい技法は、既にいくつかの論文などで紹介されているので、ここでは割愛したい。

昭和の初めに織られていたシダディの地

経縞のパターン



碁盤のパターン



糸は白で苧麻か芭蕉が使われ、紋部は赤、青、黒の木綿糸が使われていた。（田中俊雄著「沖縄の手巾」『工芸』より）文様は現在同島で織られているものと大筋は変わっていない。県博には木綿を素材に板花の技法でイルクバナの文様を織ったティサーイが収蔵されており、市松のいわゆる伝統的な文様とは違う柄も織られていたことが分かる。このような板花の技法が、いつ頃からのものかは、これも定かではないが、ティサーイという神事につかがるものとして織られていること、単純な文様の繰り返しであるということから推察して前述の与那国花織の技法よりも古くから存在していたのではないかと考えられる。

絣について

与那国では絣はほとんど発達しなかったと言つていい。わずかにカガンヌブと呼ばれる細帯（資料4）やドゥタティ（資料1）などに見られる程度である。田中氏は昭和13年の調査の際にその点を見落としたのか、著書で「与那国には今まで絣が織られず、御用布としても白布を納めていた」と述べている。しかし、資料1は100年以前に織られており、その頃には絣の技法が存在していたことになる。技法としては、資料1や資料7に見られるような簡単な絆か緯のすらしで、緯絣は手結いの技法による。これらの絣はミウトガスリ（夫婦絣の意味）と地元では呼ばれている。絣技法がこれ以上に発展しなかったことを考えると、この

ミウトガスリは自然発的に生まれたものではなく、それほど古くない時代に他から技術導入されたものという可能性も出てくる。

素材について

与那国の織物に昔から使われていたのは苧麻であったが、現在は、糸を紡ぐ人がおらず竹富島や宮古島から取り寄せている状況である。また芭蕉も戦前までは、石垣へ出荷するほどの産地であったが、これも今は生産されておらず、他からの移入に頼る現状である。

以前の糸取りについての聞き取りによると、芭蕉の糸は内側の纖維が上質なので、一番外側と二番目の糸で蚊帳を織り、三番目と四番目で着物を作るよう指導されたと言う。芭蕉糸の紡ぎ方は、本島とは異なり、撚り継ぎによる。

木綿がいつ頃から同島に入ってきたかは不明であるが、本山桂川著の『南島情緒』によると、大正年間には木綿の花織が盛んに織られている。また、池間苗氏は戦前までは木綿の畑があったと話しており、昭和の初めまでは栽培されていたことが分かる。

この他、戦前までは養蚕が盛んで、各家庭で桑を山から取ってきて蚕を養い糸を取っていた。養蚕は明治末から大戦前まで沖縄全県的に盛んで、農業試験場の指導も行われている。与那国もその例にもれず、役場からの指導もあったようである。蚕から取れた糸は精練せずに生のまま織られて

いた。資料11の花織衣裳には絹糸が使用されている。養蚕は戦後跡絶えていたが、最近また復興している。

また、与那国民俗資料館には所蔵されているドゥタテにはシルケット加工の糸やラミー（機械紡績糸）などが使われいるものもあり、これらの紡績糸は現在も使われている。八重山では昭和の初めにはこれらの糸が使われており、与那国でもその当時には既に素材として利用していたのではないかと思われる。

染色について

現存する古い衣裳から与那国で染められたと確認できる色は黒、紺、浅地、赤、茶であり、染料として昔から使われて現在に至っているものはテカチ（シャリンバイ）、福木、藍である。藍については前述されている通りで、栽培された藍の他に伊豆味産の琉球藍も使われていた。最近は伊豆味の藍の他に蓼藍とインド藍を植えつけて栽培している。

黒の色は、最近は藍の下染めにテカチと泥媒染で得ているが古い衣裳の黒がどの染料によるものかは確認されていない。

赤の色については、瓦をすって染めたなどの伝承はあるが、確かなものではない。

むしろ、昭和の初めにはすでに、島外で染められた青や黒の糸が入ってきて使われているところから（田中俊雄著「縫をたづねて」『工芸』昭和14年発行より）、赤い糸も島外からのものと考えることもできる。

実際に本島には中国産の赤い糸がたくさん出回っており、また蔵元氏が「沖縄からの薬でも染めた」と話しており、化学染料で染めた可能性もある。

この他に、以前はンナン（くちなしの実）も黄色の染料として使われていた。またクロトンも戦後、工業指導所の指導により利用された。

媒染助剤として泥が頻繁に使われていたようで、与那覇氏の研究によると田の泥の他にも下水（生活排水）の泥や川の泥などでも染められていたことが分かっている。

また、黄色の媒染には洞窟の石灰水を使っていたようである。

与那国の織物の現状と課題

沖縄は多くの島をかかえており、各島々には自分達の衣生活をまかぬ織物があった。しかし、時代の流れと共にそれらの技術は跡絶え、与那国島のように残っていることは希なことだと言える。それは文様に他の島にはない特徴があったこともさながら、島内での需要があったからで、このことは織りの伝統を受け継いでいくさえでもあったろう。昭和48年に組合ができ、昭和53年には工芸館が建てられ、通産大臣指定する工芸品として名を連ねることとなり、婦人達の副業的存在から、確かに地域の産業として位置づけられたが、実際の問題として織りを専業とする人はまだまだ少ない。昭和60年に沖縄協会が発行した『沖縄の織物に関する調査報告書』によると、

与那国の織手の経験年数は一年以内が30%と多く、後継者の養成を行っているにもかかわらず、織手は流動的で定着していないことが分かる。またこの仕事に専念する人が少ないので、染料、繊維、デザインや用途の開発、流通など研究すべき課題が山積みとなっている状態である。島の内外からの需要は供給以上にあるというが、織りを專業としていくには生活への不安材料が多い。織手の生活保証のためにも共同受注への積極的な働きかけと共に現在の流通システムの改善、また研究、研修への派遣など、ややもすると閉じ籠もりがちになる島の織手への情報提供は重要ではなかろうか。

おわりに

今回の調査は昭和62年に行った織物衣裳の調査を下敷きに昭和63年6月、平成元年3月に行った聞き取りを元にまとめたものである。衣裳の調査は上間尚子と与那嶺一子が、聞き取りは津波古聰と与那嶺が担当した。

調査に当たり、与那国民俗資料館の池間苗氏（大正8年生）、織物組合の徳吉マサ氏（大正9年生）、蔵元ナスマ氏（明治26年生）、与那覇直子氏から多くのご教示いただき、ここに感謝の意を表する。

与那国には現在、古くから伝わる織物衣裳がいくつか残っており、この紙面で紹介したい。資料の所在は与那国民俗資料館（与那国町与那国52）と与那国町伝統織物事業共同組合（与那国町与那国175）がほ

とんどであるが、個人蔵もいくつかある。

苧麻で織られた紺地の与那国花織（イルクバナ）の衣裳、白地の花織に藍で花や鳥の文様を型付けした衣裳、やしらみ織の衣裳などがまだ残っていることを確認している。また与那国民俗資料館には、紙面で紹介できなかった他に、グンボウ（木綿と苧麻、芭蕉の交織布）やドゥタティの資料や、島内、島外で織られ島の人々が生活の中で用いた衣裳がかなり収蔵されていた。

ここで紹介する資料は、100年以前のものから50年ほど前の比較的新しいものまで掲載してあるが、与那国の織物が生活の中でどのように活用されていたかを考察する資料としていただきたい。

参考文献

- 『沖縄織物の研究』 田中俊雄・玲子著
昭和51年発行
- 「紺をたずねて」『工藝』 田中俊雄著
昭和41年発行
- 「沖縄の手巾」『工藝』 田中俊雄著
昭和18年発行
- 『南島情緒』 山本桂川著 大正14年発行
- 『台湾の蕃布』 岡村吉右衛門編輯
昭和43年発行
- 『沖縄織物に関する調査報告書』
沖縄協会編 昭和60年発行

1 木綿黒地絹縞に絣上衣

方言名：ケラマキドゥタテ

素 材：絹緯とも木綿

織の密度：1cm²にタテ26・ヨコ22

染 色：地色（絹緯とも黒）

縞 （浅地・白）

絣 （白）

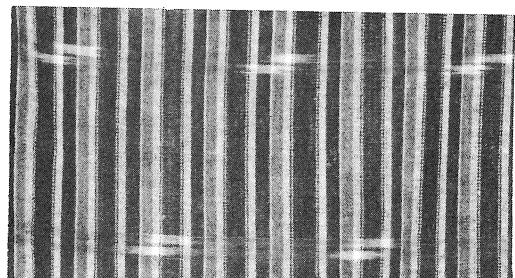
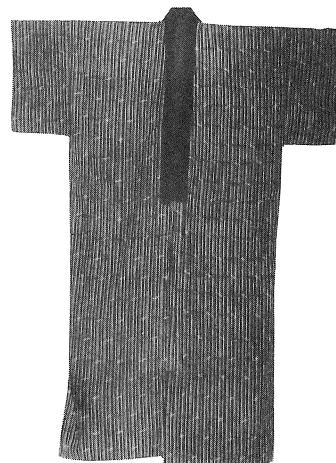
絣の柄名：ミウトガスリ

着物の寸法：丈112.4・桁49.4

備 考：製作は130～140年ほど前で、

冬の日常着として使用。男女兼用されたもので、単衣仕立てである。絣は手結いの技法によるもので、本島ではヒチサギー（引き下げ）と呼ばれる柄である。

（与那国町伝統織物事業協同組合蔵）



2 木綿麻やしらみ花織上衣

方言名：ドゥタテ

素 材：絹緯とも木綿・苧麻

織の密度：1cm²にタテ26・ヨコ21

染 色：地色（絹緯とも白黒）

花織の柄名：ダッチンバナ

着物の寸法：丈116.4・桁53.4

備 考：夏の日常着である。白の糸に

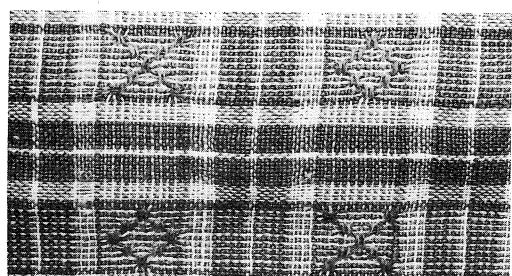
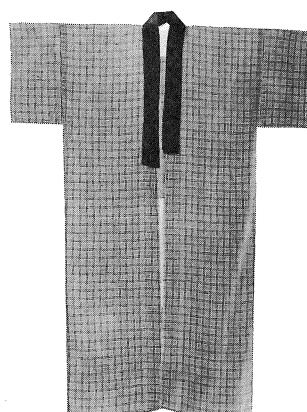
は苧麻と木綿が使われている。

黒の色には藍染めが施されて

いる。格子縞はダマトグバン

と呼ばれるものである。

（与那国町伝統織物事業協同組合蔵）



3 木綿芭蕉白地縞に絣上衣

方言名：フディリドゥタテ

素 材：絹緯とも木綿と芭蕉

織の密度：1cm²にタテ28・ヨコ22

染 色：地色（絹緯とも生の色）

縞（白、黒、青）

絣（白）

絣の柄名：ミウトガスリ

着物の寸法：丈 116.3・桁 49.4

備 考：縞縞の青の色は藍染。単衣仕立

てで日常着として着られたもの。

フディリには絣の意味がある。

（与那国民俗資料館蔵）。



4 木綿浅地絹縞に絣細帯

方言名：カガンヌブ

素 材：絹緯とも木綿

染 色：地色（絹緯とも浅地）

縞（紺、白） 絣（白）

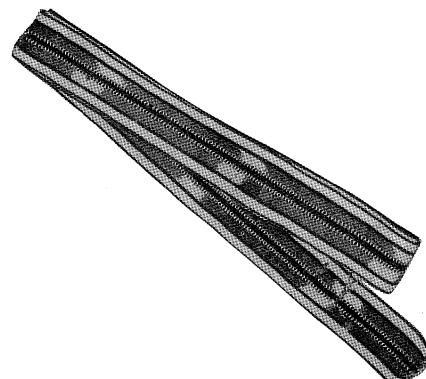
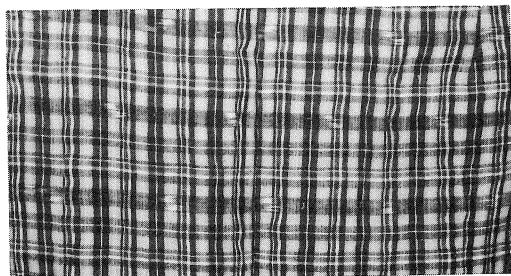
絣：柄名（ミウトガスリ）

寸 法：幅 5.5・長さ 204.2

備 考：池間マント（慶応生まれ）使

用。地色の浅地、縞の紺は藍

による。（与那国民俗資料館蔵）



5 芭蕉子守着

方言名：クミヤア

素 材：絹緯（芭蕉）

寸 法：丈 70.1・桁 32.6

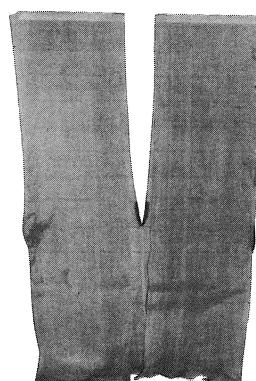
備 考：着物のような形態をしていて、

乳幼児をおぶう時は、袋のよ

うになる。昭和35年ごろまで

使用されていた。

（与那国民俗資料館蔵）



6 麻紺地格子踊衣裳

方言名：スイツア

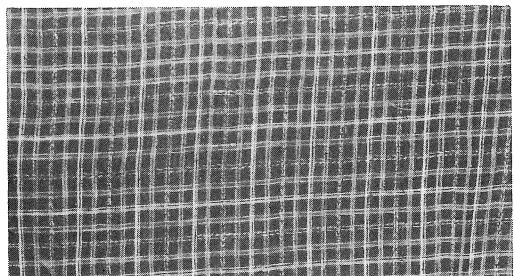
素 材：経は苧麻と木綿、緯は苧麻と
木綿

染 色：地色（経緯とも紺）

縞（赤、浅地、白）

着物の寸法：丈 101・桁 53.5

備 考：製作は130～140年ほど前で、
今は踊衣裳としてしか使われ
ていないが、この衣裳が織ら
れた当時は女性の晴着であっ
た。カガン（裙）と対をなし
て着用するもので、池間氏は
子供の頃に死装束として着用
させるのを見ている。石垣島
でスディナと呼ばれるものと
同形態である。（崎元信氏蔵）



7 麻紺地経縞に絢上衣

方言名：特になし

素 材：経は苧麻と木綿、緯は苧麻

織の密度：1cm²にタテ22

染 色：地色（経緯とも紺）

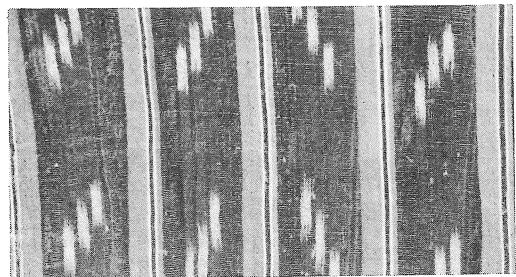
縞（赤・浅地）

絢の柄名：特になし

着物の寸法：丈 107・桁 45.2

備 考：单衣仕立てで、女性が着用し
たものである。縞文様には木
綿の糸が使われており、赤い
色は瓦をすった粉で染めたと
の伝承がある。地糸の紺、縞
の浅地は藍による。

（崎原某氏蔵）



8 芭蕉絹縞上衣

方言名：バスンナニ

素 材：経は芭蕉、緯は苧麻

織の密度：1cm²にタテ22・ヨコ16

染 色：地色（経緯とも生の色）

縞（茶）

着物の寸法：丈122・桁52.0

備 考：糸芭蕉の纖維で織られたもの

で絹糸は撚りかけされている。

糸の繋ぎは、玉結びではなく、

撚り継ぎによる。茶の染料の

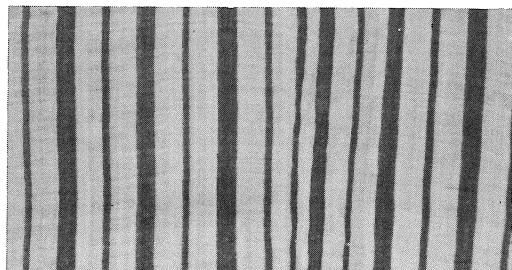
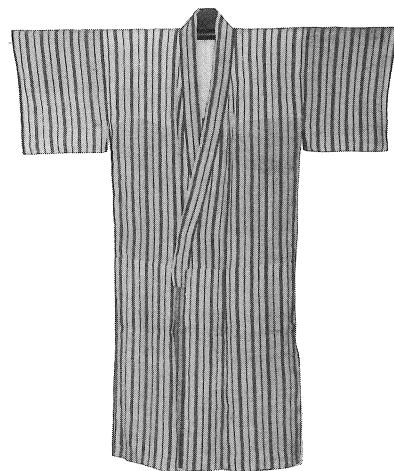
テカチは海風によく当たった

木の根の方が濃い染液が得ら

れた。衣裳は日常着として使

用されたものである。

（与那国民俗資料館蔵）



9 木綿紺地格子に花織上衣

方言名：特になし

素 材：経緯とも木綿

織の密度：1==にタテ24・ヨコ24

染 色：地色（経緯とも深浅地）

縞（赤、白、浅地）

花織の柄名：ダッヂンバナ

着物の寸法：丈133.3・桁60.9

備 考：100年以前の製作で、衿はケ

ーシュクビー（返し衿）になっ

ていたものである。地色の深浅

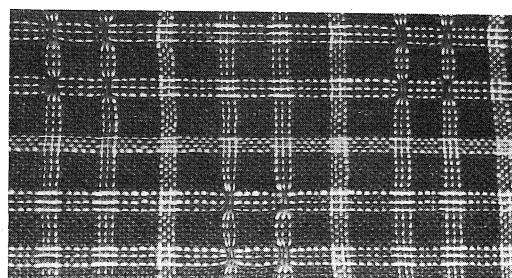
地と縞の浅地は藍による。赤の

染料は不明である。

この衣裳は花嫁衣裳として織ら

れたものである。

（与那国町伝統織物事業協同組合蔵）



10 木綿紺地花織上衣

方言名：クッタンヌ

素 材：経緯とも木綿

織の密度：1cm²にタテ26・ヨコ24

染 色：地色（経緯とも黒）

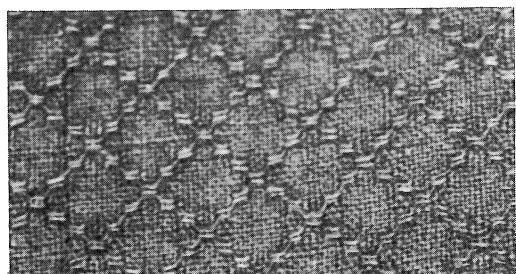
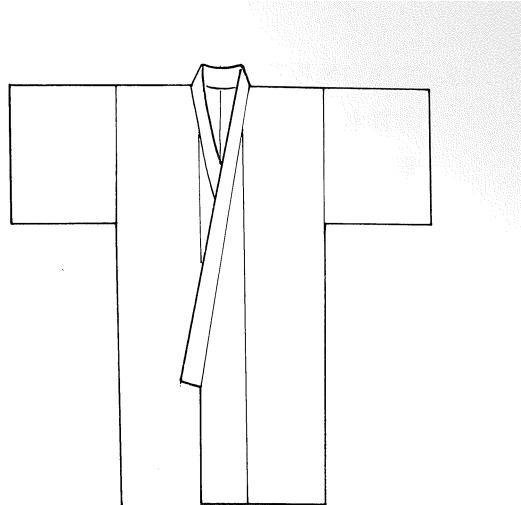
花織の柄名：イルクバナ

着物の寸法：丈 121・桁 59.6

備 考：冬の晴着で、男女兼用の衣裳

である。衿の琉装の上衣仕立てで、打ち掛けとして重ね着したものである。衿は広衿でケーシュクビーになっている。

（与那国町伝統織物事業協同組合蔵）



11 絹黒地花織衿上衣

方言名：クッタンヌ

素 材：経緯とも絹

織の密度：1cm²にタテ28・ヨコ25

染 色：地色（経緯とも黒）

花織の柄名：（アンハナ）

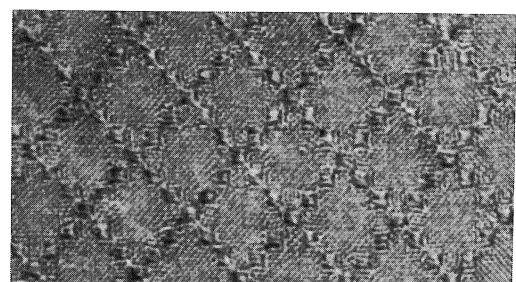
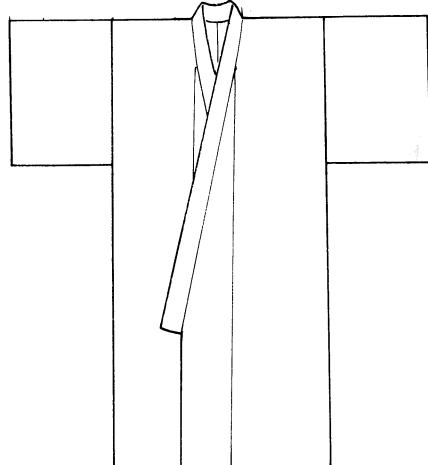
着物の寸法：丈 135.7×桁 62.0

備 考：冬の外出着として男女に関係

なく着用された。アンハナとは網の目のような花織の意味である。

明治5年生まれの伊盛某氏が織った資料である。

（与那国民俗資料館蔵）



12 木綿白地板花織陣羽織

方言名：ディンカテ

素 材：経緯とも木綿

織の密度： 1cm^2 にタテ24・ヨコ20

染 色：地色（経緯とも白）

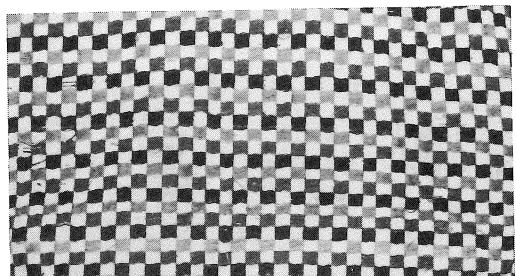
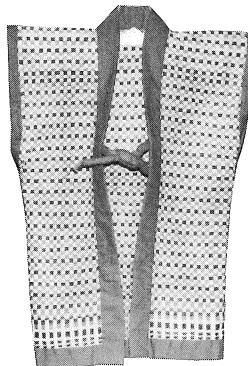
紋 （赤、浅地、紺）

花織の柄名：イタハナ

着物の寸法：丈 54.2・桁 16.1

備 考：紋に使われている浅地と紺の色は藍による。赤い衿、袖の縁、結び紐は別布で、仕立ては比較的新しい。他に同様の資料が一点ある。

（与那国町伝統織物事業共同組合蔵）



13 木綿紺白地花織子供着

方言名：特になし

素 材：経緯とも木綿

織の密度： 1cm^2 にタテ26・ヨコ26

染 色：地色（経緯とも白と濃紺）

花織の柄名：トゥングバナ

着物の寸法：丈 76.0・桁 41.3

備 考：やしらみ花織と呼ばれるもの。男の子の衣裳で、板花織のディンカテを上にはおる。このような筒袖は鉄砲袖とも呼ばれる。

（与那国町伝統織物事業共同組合蔵）

